



スゴイ農業、スゴイJA①

JA自己改革の現場から

地域のビジョンを描き、組み立てる創造的自己改革
 ——JAかいふ(徳島県)「きゅうりタウン構想」の挑戦に学ぶ

小林 元 (広島大学)

「海部きゅうり塾」4期生の皆さん

JAかいふ「きゅうりタウン構想」の魅力は、ひと口には語りつくせないもの。そこには、地図上や数字上では見えない生き生きとした人々の顔と暮らしがあります。行政や企業、大学などと連携して知恵を結集し、若者の田園回帰の志を捉え、農業で地域を元気にする取り組みの真ん中にJAがありました。

こぼやし・はじめ

広島大学大学院生物圏科学研究科助教。1972年静岡県生まれ。2004年広島大学大学院修了、博士(農学)。一社JC総研を経て2015年より現職。専門は協同組合論、集落営農論。主な著書に『JA新流』(編著・全国共同出版)、『協同の再発見』(共著・家の光協会)ほか。

きゅうりタウン構想 —ビジョンを描く構想力—

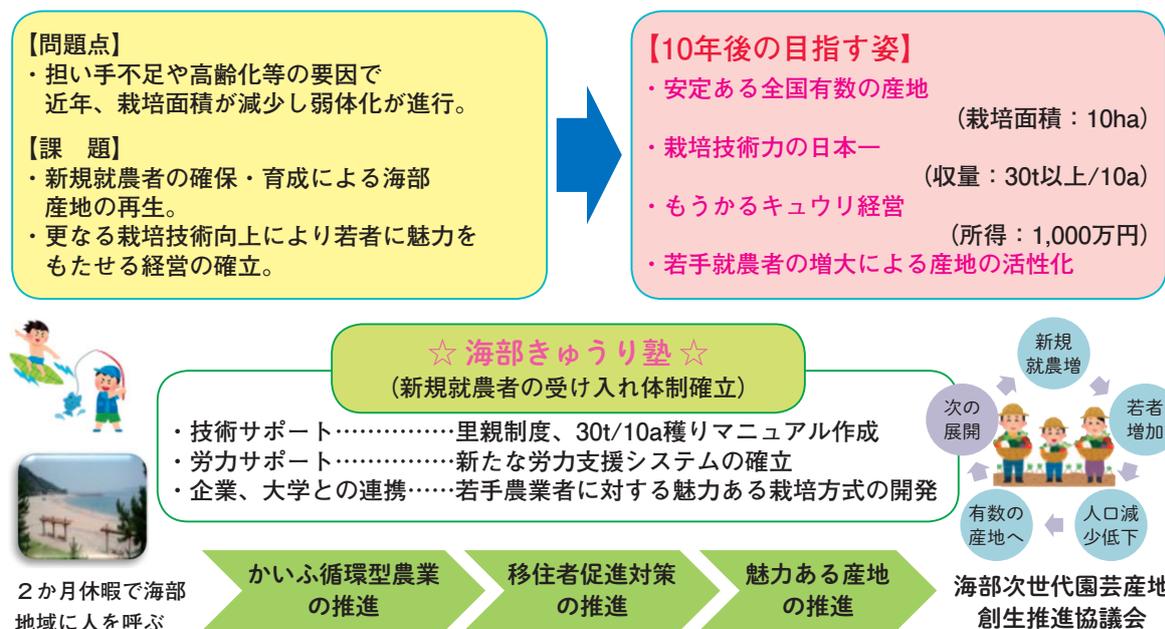
昨年秋から半年間にわたって放映されたCMを、目にした方々も多いだろう。JAかいふ「きゅうりタウン」を取り上げたJAバンクのCMである。「秘密は、ここならではの暮らし。きゅうりとサーフィンの両立もできちゃう。いいかも。」というナレーションが印象的だった。

きゅうりタウンは、JAかいふと行政が連携した産地づくり・地域づくりであり、正確には

「きゅうりタウン構想」と呼ばれる。「構想」という言葉が入ることに意味があり、地域のビジョン=夢が描かれていることがポイントだ。きゅうりの産地を、もう一度元気にすること。そのために元気なきゅうりの生産者を育み、共に地域を元気にする、こうした夢あふれるビジョンに注目したい。地域のビジョンを描く、その構想力こそが、今日のJAの「創造的自己改革」に求められているのではないだろうか。

JAの自己改革は、重点項目を中心にさま

図1 きゅうりタウン構想の全体像



資料：徳島県南部総合県民局産業交流部(美波)作成資料より。

ざまなメニューが並ぶ。しかし、縦割り化されたメニューが並び、その数量的な進捗管理のみが自己改革の名前の下で進んではいないだろうか。豊かな地域社会を築いていく中で、協同組合であるJAに何ができるのか、その社会的役割を含めて将来の地域のビジョンを描くこと、ここに創造的自己改革のひとつの目標を置きたい。そこに求められることは、組合員と職員、組合員同士の顔の見える関係づくりと話し合いであり、その先にその夢を描く構想力と、夢を実現するための実行力が鍵となる。

危機バネから始まったきゅうりタウン構想

JAかいふ管内は年間日照量が多く、促成きゅうりの産地として知られる。70年以上の歴史があり、1980年代には120軒以上のきゅうり農家があったという。その技術水準は高く、土耕栽培で反収30tを超える篤農家も多かったという。

ところが、燃料価格の高騰や農家の高齢化などから徐々に産地は縮小し、きゅうり農家は約30軒まで減少した。また、きゅうり農家は

高い技術を誇りながらも、その労働は相当に大変だ。高い収量を維持するためには、丁寧かつ重労働の土づくりが欠かせず、また収穫は長期間にわたって暑いハウスの中で毎日行われる。このため、新規に栽培を始める若者は少なく、ますますきゅうり農家は高齢化し、産地の維持が大きな課題となった。

そこで、JA、行政を中心に2015年6月から「海部次世代園芸産地創生推進協議会」を設立し、今後の産地づくりの検討が始まる。そのポイントは、第一に新規就農者の若者を受け入れること、第二に若者にとって魅力のあるきゅうり生産を実現すること、という2点であった。

第一の新規就農者の若者を受け入れるという点について、JAかいふの豊田穂^{みのる}営業部長は、「町を歩いていても、にぎやかな子どもの声が聞こえてこない。これほど寂しいことはない」と話す。若者の活力、子どもたちのにぎやかな声が、地域の活力を産み出す。産地づくりの根っこにある、元気な地域を取り戻したいという思いが、新規就農者の受け入れにつながった。

図2 きゅうりタウン構想の推進体制と取り組み



資料：徳島県南部総合県民局産業交流部(美波)作成資料より。

スゴイ農業、スゴイJA

①

小林元

第二の若者にとって魅力あるきゅうり生産という点は、相当に挑戦的だ。JAかいふのきゅうり産地は、歴史に培われた高い技術を誇る。しかし、その高い技術は、相応の厳しい労働に支えられており、必ずしも若い新規就農者には望まれるものではない。であるならば、栽培技術そのものを革新していこう、その先には農業に触れたことがない若者でも活躍できる栽培技術の確立と、そのための新しい指導方法、育成手法を編み出していこうという挑戦である。

きゅうりタウン構想のグランドデザイン

きゅうりタウン構想の中身は、前ページ図1の構想の全体像と、図2の推進体制に集約される。きゅうりタウン構想の全体像の特徴は、①現在の課題を明らかにし、②10年後の目指す姿(目標)を設定した上で、③取り組みの中身と主体を「見える化」している点にある。こうしたビジョンを描く上で重要なことは、絵に描いた餅に終わらない「見える化」であり、特に「誰が」「どのように」実行するか、そして目標の明確化(≒数値化)である。

2015年時点の構想では、2024年までに①産地面積を5.6haから10haへ、②反収を20tか

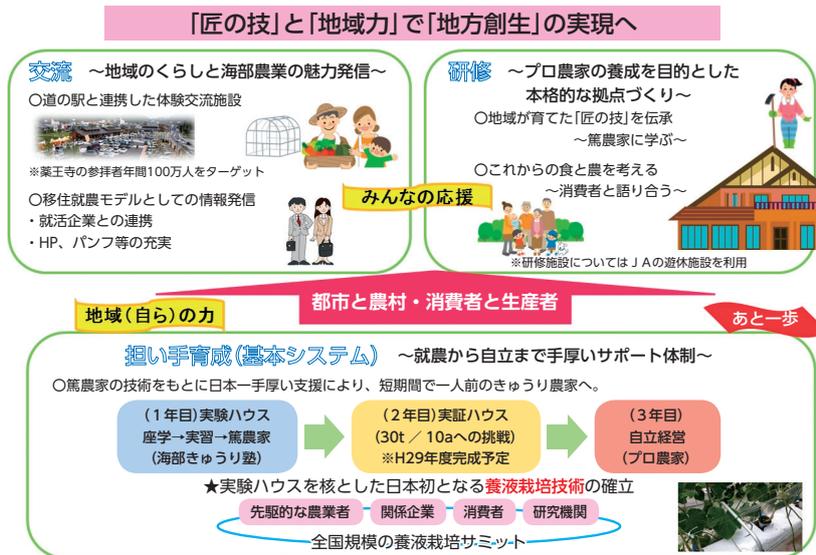
ら30tに、③所得を30aの経営面積当たり690万円から1,000万円以上へ、と高い目標を掲げている。この高い目標を達成するために推進体制と施策を明確化したものが図2となる。

きゅうりタウン構想は、JA・行政・普及・民間企業・大学・生産部会が一体となってクラスター(地理的に集積した多様な関係者が連携することで、新たな取り組みを産み出す仕組み、ぶどうの房から連想された言葉)を形成し、3つの具体的な施策を打ち出している。

それは、①地域で育まれた技術の継承を目指す「海部きゅうり塾」、②若者に魅力ある栽培技術の革新を目指す「次世代園芸実験ハウス」、③SNSやマスコミを活用した発信力の強化の3つである。この中で、肝となるのが②「次世代園芸実験ハウス」であり、全国的にもその成果が注目されている。

次世代園芸実験ハウスは、既存の土耕栽培に替わる養液栽培技術の確立が目標となっている。反収30tという篤農家の匠の技と複合環境制御技術を融合させ、栽培技術を「見える化」することがひとつの目的である。その上で、養液栽培技術を確立し、将来的には環境制御された快適な施設に「スリッパで入り、普

図3 J A かいふの構想力 ―地域のビジョンを描く―



資料：J A トップフォーラム全中資料より。

段着で作業ができる」環境を目指すという。若者にとって魅力ある農業の、未来のひとつの形なのかもしれない。

若者が集う海部きゅうり塾

海部きゅうり塾は2015年10月に開校し、1期生9名、2期生3名、3期生2名がきゅうりの栽培技術を学んだ。2015年度には4名が、2016年度には2名が就農してきゅうり栽培を開始した。また2名は次世代園芸実験ハウスのスタッフとして活躍している。2015年度に就農した4名は、地域の採算ラインである反収20tを達成しており、海部きゅうり塾での学びが実践に活かされている。

そして2017年6月現在、4期生8名が入塾した。塾生の出身地は、東京・大阪・愛知・兵庫・香川など全国各地だ。年齢は30歳代から40歳代で、夫婦で入塾した塾生もいる。入塾生に共通する特徴のひとつは、都市圏で行われた移住フェアなどでJ A かいふの取り組みを知ったことである。移住フェアを通じて、積極的にきゅうりタウン構想を発信することはもちろんだが、きゅうりタウン構想の明確な目標と取り組みの分かりやすさは、田園回帰を志す若者の心を的確につかんでいる。



J A の豊田部長。地域の魅力を伝え、県や町など行政とも連携して取り組む

地域の篤農家に技術を学び、J A がきゅうり栽培をサポート、暮らしに関わっては行政の「空き家バンク制度」の活用など、移住のサポートは手厚い。同時に、促成きゅうり栽培の粗収入1,500万円・所得500万円という所得目標が明確となっていることが、若者の心をつかむようだ。

これらのサポート体制と明確な目標以上に若者の心をつかんでいるのは、J A かいふの豊田部長だと4期生は声をそろえる。移住フェアで豊田部長の話聞き、その人柄にほれ込み、信頼して移住を決めたという。人と人とのつながり、顔が見える関係、すなわち協同の原点が決め手ということだ。

半農半X

—新規就農から地域での暮らし方・ライフスタイルへ—

海部きゅうり塾に入塾すると、地域の篤農家の指導の下、きゅうりの栽培技術を学ぶ。入塾したばかりの4期生が、地域の組合員や住民と触れ合う機会はまだ少ないようであるが、卒業生たちはさまざまな場面で、地域の人々との交流を深めて、地域に溶け込みつつある。1期生の女性のひとは、土耕栽培の面白さ（もちろん作業は大変だが）に気が付いたと言いき、今ではJA女性部の^{ししくい}穴喰支部（穴喰女性部）の役員を務めている。顔が見える関係づくりは、新規就農者の定着にとって重要なポイントであり、女性部や生産部会などの組合員組織での居場所づくりも求められるだろう。

居場所づくりという点に着目すると、きゅうりタウン構想の大きな特徴が見えてくる。それは、新規就農者の地域での暮らし方・ライフスタイルであり、「半農半X」という言葉に表現される。JAかいふ管内は、サーフィンのメッカだそうで、全国のサーファーにとって憧れの地ということだ。4期生の中にも、海部きゅうり塾を選んだ理由に、サーフィンを挙げた塾生が少なからずいた。きゅうり栽培が順調ならば、農閑期や作業後にはサーフィンを楽しむことができる。冒頭に紹介したJAバンクのCMのナレーションの一節、「秘密は、ここならではの暮らし。きゅうりとサーフィンの両立もできちゃう。いいかも。」が、海部きゅうり塾の魅力でもある。

自然に恵まれたJAかいふ管内では、サーフィンだけでなく釣りなどのレジャーを楽しむことができる。自分なりのライフスタイルを求めて、海部きゅうり塾には若者たちが集まっ



JAの濱崎組合長。新規就農者の話を聞くことで、あらためて地域のよさや独自性も浮きぼりになってきた

ているのだ。

地域のビジョンを描き、組み立てる —創造的自己改革のひとつの到達点—

JAかいふ「きゅうりタウン構想」の魅力は語りつくせない。そこには、地図上では見えない、数字上では見えない生き生きとした人々の顔と暮らしがある。危機バネから出発して、行政や企業、大学などと連携して知恵を結集し、若者の田園回帰の志を捉え、地域を元気にする取り組みの真ん中にはJAがある（前ページ図3）。JAかいふの取り組みに学ぶ点は、仕組みや技術だけではない。地域の未来＝ビジョンを描き、農業を核に地域を豊かにするというJAの社会的役割を発揮しようとする挑戦にこそ学びたい。

ヒアリング中、全てに同席いただいた濱崎禎文代表理事組合長の、孫を見守るような優しいまなざしが印象的だった。濱崎組合長は、「人が生きていく地域という考え方は、地域の特徴や独自性を生かすこと。そして、人と人のつながりや絆だ」と語った。協同の力を通じて、そこに構想力を働かせ、総合的な取り組みに横串を通すこと、その先には豊かな地域の真ん中にJAがある。JAはもっと自信を持っていいし、自信を持って創造的自己改革を進めてほしい。